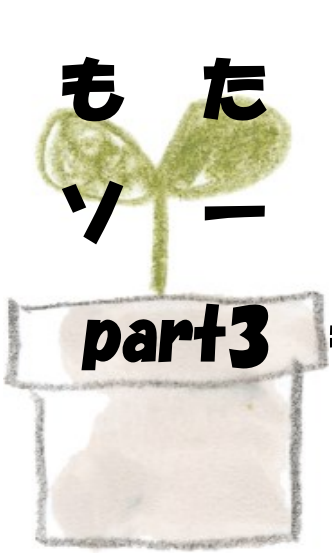
ともに育つこどもたちのエピソード集part３

発行：令和７年７月
編集：東松山市地域自立支援協議会
東松山市こどもの育ちと学びを支える連絡会議
事務局：東松山市役所健康福祉部障害者福祉課

ともに育つこどもたちのエピソード集

＝part3＝



認め合い、支え合い、ともに暮らすまち

東松山の推進

～すべての人が主人公になるまちを目指して～

東松山市地域自立支援協議会
障害のあるこどもの育ちと学びを支える連絡会議

発刊に寄せて

東松山市障害のあるこどもの育ちと学びを支える連絡会議

会長　狐塚　汐里

日頃より、東松山市の子どもたちの健やかな成長と、地域の保育の発展のために、多大なるご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

東松山市では、障がいのあるお子さんも含め、すべての子どもたちが共に認め合い、学び合い、育ち合う保育を大切にしております。

子どもたち、一人ひとりの個性が輝き、誰もが安心して過ごせる環境づくりが重要です。

今後も保護者の皆さま、地域の皆さまと手を携えながら、東松山市の子どもたちの笑顔を守る、温かい地域づくりに努めてまいります。

引き続き、皆さまのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

・みんな同じ悩み、思いをもって

保育に関わっているのだなと思った。

「ともに育つ」を大切にしていきたい。

・東松山市をよくしていきたい！

・正解はない。だが、みなを認め、

許しあう社会づくりが

これから必要なのではないか。

「～しなければならない」をはずしていきたい。

・立場が違っても、やっぱり原点は、

子ども真ん中で、

みんなが「育ちあう」ことを大切にしていると

感じられた。

☆彡　研修会参加者から届いた声

・「ともに育つ」この言葉の深さを
　明日からもいろいろ学んでいきたい。

・「そうそう」と共感したり「そうか」と
　思うことがたくさんあった。

・親としてもこのように子を思う先生が
　増えてほしいと思った。

・保育者が伝えるより、同世代の子どもが
　伝えたほうが、子どもの心に響くことが
　あるという学びがあった。

・「児発は応援団！」心に刻み明日からも頑張りたい。

このエピソード集は、【令和6年度「ともに育ちあう」を考える研修会】の、パネルディスカッションの内容をまとめたものです。

●パネリスト

☆認定こども園　松山聖ルカ幼稚園
主幹教諭　堀江　美保

☆仲よし保育園
副園長　大塚　綾子

☆児童発達支援事業所
縁キッズ東松山・縁ベリー統括管理者　木村　由美

●目次

1．事業所紹介　P4
2．「ともに育ちあう」それぞれの現場からの報告　P6
3．今の時代の現場のお話　P12
4．「ともに育ちあう」ことをあきらめない　P16

※　本文中は、パネリストの敬称を略させていただきました。
※　パネリストの役職はR6年度時点のものです。
※　本文中の子どもの愛称は、仮称となっています。

１．事業所紹介

○松山聖ルカ幼稚園　堀江

松山聖ルカ幼稚園は、2018年4月から認定こども園になりました。本園はキリスト教会付属の幼稚園で、2026年に100周年を迎えます。それぞれのクラスに支援が必要な子どもがおり、担任、副担任、パート職員で全体を見ながら保育を行っています。

○仲よし保育園　大塚

仲よし保育園は、市内で一番古い創立の保育園で、「幼児期に遊びこみ、遊びの中から学ぶ」を大事にしています。

園児数は約120名。4，5歳児にそれぞれ２～3名程度支援が必要な子どもがいます。最近、様々な生活環境や家庭環境で、ゆっくり育つ子どもも増えてきた感があり、支援が必要な子どもとの線引きが難しい状況になっています。

○縁キッズ東松山　木村

縁キッズは、児童発達支援と放課後等デイサービスという福祉サービスを提供する施設の運営をしています。

児童発達支援では、0歳から就学前の、療育を必要とし、各市町村が支給決定をして、受給者証を発行された幼児を支援して

「ともに育ちあう」とは、大人が子どもから教えてもらうこともありますし、子どもから子どもに伝わることもあります。そんなことを大切にできる「社会づくり」をしていければよいと思います。

令和６年度「ともに育ちあう」を考える研修会

「かけがえのない幼児期の育ちをあらためて考える」

～こどもの支援者のワールドカフェ～

日　時　　令和7年1月27日（月）14時30分から

内　容　　第1部　講演　埼玉県立大学　名誉教授　朝日　雅也氏

第2部　パネルデスカッション

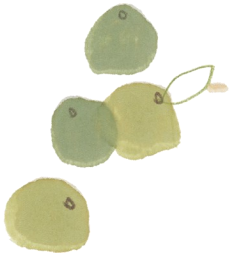
第3部　ワールドカフェ

小学校に上がり、児童発達支援から放課後等デイサービスに移行後、先生の話を聞けるようになったり、トイレに声かけだけで行けるようになったり、 みんなと一緒に動くことができるようになっている子どもがたくさんいます。まだまだ自分の気持ちが1番の子どももいますが、切り替えが早くできるようになったりしています。このように成長している姿を、児童発達支援と放課後等デイサービスの事業所で、私は確かに見ています。今は難しくても、スモールステップでできる時がくるのです。

余談ですが、私は小学生の頃、算数が苦手でした。でも、学年が上がるとわかるようになった経験があります。「どうしてできないの？」と聞かれても、その時はできなかったのです。そっとしておいてくれて、よかったと思うこともありました。

誰にでも苦手だったことがあったはずです。 そして、もしかしたら苦手なまま大人になっている人もいるかもしれません。それでも、なんとか切り抜けてきているのではないでしょうか？

支援が必要な子どもであっても、できないことばかりではないはずです。できることに焦点を当てて、どの子にもたくさんの可能性があること。そして、今は難しくても時間が解決することの方が多いことを忘れないでいたいと思います。どうしても今しなくてはいけない時には、「一部分だけでもできればよし。」と笑って言えてしまうくらい、ポジティブであればいいと思います。



います。公園や児童館に行って、地域でのルールを覚えたり、買い物体験などを行っています。また、手先を使って粘土や磁石で遊んだり、トランポリンやバランスボールをつかった取り組みも行っています。

放課後等デイサービスは、小学1年生から高校3年生までが対象年齢となり、児童発達支援と同様に、療育が必要な子どもを学校終了後に預かり、宿題などの支援を行っています。

この時間に幼稚園、保育園に通っている子どもたちも、降園後から学齢期のお兄さんやお姉さんたちと一緒に過ごし、おやつを食べたり、時には一緒におやつづくりや料理を行っています。 土曜日や長期休みは、児童発達支援・放課後等デイサービスの両事業の子どもたちが、朝から一緒に過ごしています。

毎日の定員は、児童発達支援、放課後等デイサービス合わせて15名。職員は6～7名で運営をしています。

現在縁キッズ東松山と吉見町の縁ベリーで、東松山市在住の幼児の利用者は１６名、そのうち幼稚園などの併用者は１０名です。

２.「ともに育ちあう」

それぞれの現場からの報告

○松山聖ルカ幼稚園　堀江

聖ルカ幼稚園はキリスト教の幼稚園なので、１年を通して クリスマス会で行う聖劇を行事の中でも1番大事にしています。毎年3週間ほどかけて練習をしています。

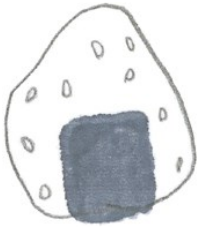
クラス全員で進めていくにあたり、支援が必要な子どもにどのような参加方法があるのかを園内で検討したり、保護者とも、「こんな感じで参加するのはどうでしょう。」と話し合っています。

ある年、聖劇でつかう、園に代々伝わる衣装を着るのが、苦手なあっちゃんがいました。そこで、衣装を持って帰って、自宅でも何回か着てもらう練習をして、本番には衣装を着て舞台に立つことができました。また、聖劇は入場から退場まで40分ほどあるため、本番は自分の役の出番と、最後の全員で集まり歌うところに参加し、みんな一緒に退場する形で参加ができました。 練習の時は、わあわあ声が出たり、そこにいるのが苦痛で仕方がないようなこともありましたが、徐々に慣れ、本番はみんなと一緒に終わらせることができ、涙、涙の聖劇になりました。周りの子どもたちも、あっちゃんが声を出しても、自分の出番や 演技がぶれることはありませんでした。普段からクラスにいて、一緒に生活をしているからこそ、あっちゃんの全

きたらと思います。

枠が狭くてしっかりしていると、みんなが動きづらい。少し緩めて、個々それぞれの性格や特性を見つめ、「こうでなければならない。」という視点から、「これもありだな。これでもいいかな。」と思うことができたらよいなと思っています。そして、幼児期に関わる幼稚園も保育園も児童発達支援も、障害があるとかないとか関係なく、どんな子どもにも愛情をたっぷりかけて、スキンシップをとって、自信につなげ、「今ここにいていいんだ。 お友だちと一緒にいられることが素敵なことで、楽しいことだ。」と感じてもらえる、そんな社会づくりができればいいなと思います。

幼稚園、保育園の行事や 日常生活になかなか馴染めない子どもがいれば、児童発達支援事業所は応援部隊なので、練習などの手伝いをさせてほしいです。例えば、運動会のダンスでかける曲を教えてもらえれば、事業所で同じ音楽を流すことができます。 サビの部分だけでも振り付けを教えてもらえれば、みんなで踊って練習ができます。遠足の場所を教えてもらえれば、みんなと一緒に現地に出かけて、安心して行けるように協力できると思います。園の行事など、教えてもらえれば、できる限り協力したいです。児童発達支援は応援部隊！ 事業所を土台にしてもらえればと思っています。練習したことは、大きな成長につながるし、もしうまくできなくても、幼稚園の先生や友だちと頑張ったこと、応援してもらったことはかけがえのない思い出になると思います。



幼児期にできることが少なかった子どもも、

されている思いをたくさん受けて、その満たされた心で子どもたちが育っていけば、支援の必要な子どもと一緒に過ごしていく時に、みんなで育ちあっていくことが、きっと自然にできるのではないかなとなと思っています。

支援が必要な子どもに、時に加配職員が必要となります。その時、大人がその子につきっきりになってしまうと、その子が特別な存在になってしまうと日々感じています。子どもたち自身が、大人がなんとかしてくれるだろうという目線になってしまうのです。大人の手が足りないと、自然と子どもは手伝おうとしてくれたり、手を差し伸べてくれます。大人が出すぎず、子どもの出番があることは、すごく大事なことと気づかされました。なので、生活の中に日々子どもの出番があること、そしてその時に大人が「〇〇ちゃんがいてくれて助かったよ。ありがとう。」とたくさん伝えていくことで、子どもの自己有用感のベースができてくると思います。子どもが育てられるだけの存在ではなくて、周りを育ててくれる存在だということを日頃思っています。「ともに育ちあう」は、子どもの力も借りながら、みんなで過ごしていくことかなと思っています。

〇縁キッズ　木村

全ての子どもたちがどんな時も、どんな場所でも平等であるとよいと思っています。子どもに関わる方々や地域の方々と対話をしながら、色々な側面から折り合いをつけられることがで

てを受けとめる気持ちが育っていたと、感じる場面でした。聖劇は静粛な場で行う劇なので、当日は、保護者の姿が見えると、心を揺さぶられてしまうかもしれないと心配し、できるだけ本人から見えない場所で、観覧してもらいましたが、「 最初から涙涙で、とても感動しました。」という言葉をいただくことができました。

〇なかよし保育園　大塚

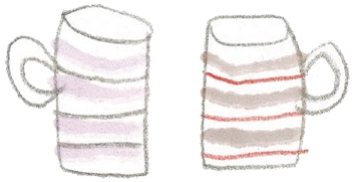
なかよし保育園では、「共育ち」を保育の軸としています。子どもたち同士、どんな子どもも一緒に遊び、生活して育ちあう。 また、クラスの子ども以外、異年齢でもいろいろな子どもたちと関わったり、担任以外の保育士も含めて、みんなで子どもを見合うということをしています。その中で、保護者も私たち保育者も「みんなと育ちあっていくんだ」というような思いで、日々保育にあたっています。

その中で、私が担任した、3歳児の支援が必要なゆうちゃんと、クラスの子どもたちの話しをしたいと思います。

3歳児26名を、13人ずつ2クラスに分け、それぞれ担任がつき、その1クラスの中にゆうちゃんがいました。3歳児は、生活自立面が大事な1年なので、13人の小集団に保育士が1人つき、家庭的な雰囲気の中で保育をしています。この時は補助の保育士はなく、担任1人で、ゆうちゃんを含む13人を見ることになり、私たちはそういう状況も受け入れるしかないと思っていました。

ゆうちゃんは、 常に動きがあり、ジャンプをずっとしているような様子でした。また、私たちや友だちの言葉の理解や発語は、まだありませんでした。そして、高いところへ登ることが大好きで、とにかく机や棚など、どんどん高いところに登って、そこが自分の居場所になって落ち着けているという状況でした。

４月からクラスが始まり、当初、新入園児が８人おり、ごちゃごちゃで、クラスの子どもも、動きの激しいゆうちゃんに驚いたり、「ちょっと怖いな」と正直思うような子どももいました。私たち担任ができることは、ゆうちゃんが今していることは 「〇〇したいんだね。」「きっと今〇〇しているんだね。」と、ゆうちゃんの様子を言葉にして返していくことぐらいでした。目の前の子どもたちは、まだ3歳児なので、「大人に見てほしい。」とか、「自分たちも甘えたい。」そういう気持ちでいっぱいでした。なので、いつも「なんでゆうちゃんだけそれが許されるの？」とか、「なんでいつも先生はゆうちゃんの方に行くの？」みたいな思いが、最初はあふれていました。



でも小さい頃から毎日一緒にいると、ゆうちゃんのことをよく子どもたちもわかってくるもので、 ゆうちゃんの色々な行動を知らんぷりする子どもはいませんでした。私たちは年間を通して裸足の生活をしているのですが、裸足のまま部屋から外に出て行き、そのまま中に入ってしまうゆうちゃんに、「ここはお部屋なんだよ」と、一生懸命足を洗う手伝いをしてくれました。

やって「自分が大切にされている」この思いをたくさんこの時期に味わってほしいです。そして自己肯定感の基本をしっかり幼児期につくってほしいと思っています。。

保育園の年長児で、親の愛情をなかなか受けられない、はるちゃんがいました。土日家で過ごした後の月曜日が１番心が荒れていて、私たちが「そういうことをやってしまうか！」という危ないことをやってしまったり、保育園の門から出ていきたくなることなどが日々ありました。はるちゃんは初めのうち、「世の中のみんな（親も含めて）が、自分のことを好きじゃない。」と思っていました。私たちが、「はるちゃんが心配だから言っているよ。」「危ないよ！怪我したら悲しいよ！」と伝えても、「嘘だ嘘だ！ 誰もはるのこと好きじゃないもん！」と言っていました。時間をかけて、「違うよ。大好きだから言っているの。はるちゃんが大事だから言っているよ。」と毎回伝え、やっと職員みんなが「はるちゃんこの頃表情が柔らかくなってきたね。」とわかるようになってきました。たとえ家では満たされず、そこを埋められなくても、保育園では周りの職員や子どもで、その子が「大事にされている」と感じてもらうことはなんとかできるのではないか、埋めていけるのではないかと、迷いながら対応してきました。はるちゃんとの関わりの中で、あらためて埋めていけることに気づくことができました。

いろいろなところで効率化が求められていますが、子育てだけは、効率化されるべきものではない。手間暇かけられるものであってほしいと願っています。そうやって手間がかけられて、大切に

４．「ともに育ちあう」ことを
あきらめない。

○聖ルカ幼稚園　堀江

私も子どもが２人いて、０歳から保育園にお世話になりました。職場では子どもが何かすればちゃんと待ったり、ゆっくり話を聞くことができるのに、家に帰ると我が子には、じっくり話を聞くとか終わるまで待つということがなかなかできず、自己嫌悪に陥ることも多くありました。支援が必要な子どもの保護者は特に、自己嫌悪に陥ることがあるのではないかと思います。幼稚園としては、専門の先生からもアドバイスをもらい、その中で関わり方などを学び、保護者に伝えたり、その子にとってよいと思われる関わり方を日々模索しながら保育をしたり、保護者の支えにもなれたらよいと思います。

子どもは、１人１人みな違うので、その子その子を理解して、関わっていくことがともに育っていけることなのかなと考えます。

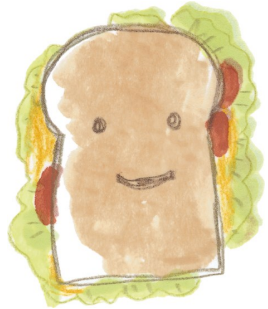
○仲よし保育園　大塚

幼児期は、親だけではなく、様々な年齢の子どもたち、担任以外の先生たち、地域の人など、様々な人と関わって、声をかけ合い、そして手間をかけてもらって愛情をもらうということは、人生の基盤になってくると思います。そう

ゆうちゃんがどんどん高いところに登ってしまっても、目の届かない時が私たちもあって、そういう時に「大変！大変！ゆうちゃんが筆筒の上まで登っている！」と教えてくれました。

また、ゆうちゃんは、ドアの開け閉めをエンドレスにやるのが大好きでした。みんなもドアを通りたいのですが、「ゆうちゃん、やっているな」と思うと、ゆうちゃんを止めることなく、そっと出る方向を自分が変えたりということを、普通になんとなくできていて、そういう様子を見るたびに、「子どもは、よくゆうちゃんのことをわかってくれている。ありがたいな。」と思っていました。ゆうちゃんは何かを止められるとパニックになってしまうので、そこらへんもきっと子どもたちは、経験上理解していたんだと思います。

お昼の時間ゆうちゃんは、自分のご飯を食べ終わると、好きなものがあれば誰のものでも食べてしまうのです。これもまた子どもたちは、最初は怖くて、自分の食べものを取られちゃう。嫌だけど、それもなかなか言えなくて、「僕のがない…」みたいな感じでした。でもそういう時にも「どうしたらゆうちゃんが、自分のご飯ってわかるのかな？」と考えて、「ゆうちゃんが、自分のランチョンマット（ただの紙なんですけど）の上にのせればいいんじゃない！」と、ゆうちゃんだけが自分のランチョンマットを作るという提案をしてくれたこともあり、子どもの発想に助けられました。



１組、２組でお昼寝前に絵本を読むのです

が、ゆうちゃんも、だんだん担任に慣れてくると独占したくなり、ずっと離れずにいて、担任は絵本が読めなくなっていました。そうすると子どもたちは、「このままだときっと絵本は始まらないな。」と思うと、隣のクラスに「混ぜて！」 と行くのです。それで「ゆうちゃんは先生がいいんだって。先生を貸してあげたから、僕たちこっちに見に来ていい？」みたいな感じで、本当に感心しました。もしかしたらどこかで我慢をしているところもあったかもしれませんが、我慢しすぎるのではなく、甘えるバランスを子どもなりにとっていると感心していました。

散歩のエピソードもあります。ゆうちゃんも一緒に行くとなると、担任は手を繋ぐことも難しく、それでもぴょんぴょんしながら一緒に散歩に出るわけで、そんなに遠出はできない状況でした。ある時「初詣に行きたい！行く先は神社！」という意見が出ました。「ちょっと遠いな…」と今までは諦めていたところを、子どもたちの方から、「じゃあ、ゆうちゃんは、 僕たちが両方の手を繋げばいいんじゃない！」と。いつもは、担任が一人で一生懸命繋いでいましたが、「両方子どもならいいんじゃない！」みたいな感じでした。「大丈夫かな…」 と思いながらもやってみると、ゆうちゃんは、仲間をわかってきていて、私よりも子どもたちの言うことを聞いてくれる状況がありました。「私がつかなきゃいけないと思っていたことは、もう違うんだ。」と思わせてくれました。このように、 子どもたちの力を借りて、助けられていた日々で、本当に子どもは、分け隔てなくお互いを見ていると思いました。

重要なことになってきていて、保護者も大変なことがいろいろあると思いますが、子どもを中心にした話をしても、理解してもらうことが難しくなってきていると思います。

○縁キッズ　木村

保護者のニーズに、「できることを増やしてほしい。」ということがあります。「貸して。」が言えたり、順番を守るなどの集団活動ができるようになってほしい…などなど。事業所としては、集団に入るまでの訓練や準備も大切にしていますが、それ以上に、「これから生きていく上で大切なこと」例えば人と共感ができたり、様々な経験を積むことなどを、重要なことと位置づけ取り組んでいます。 保護者の気持ちや思いを受け止めつつ、どこまでを良しとするのか、何を大切に取り組んでいくか、事業所、家庭での役割は何か、お互い模索をして話し合いながら進めています。

かなり刺激の強いものだと思います。お昼寝前の、ぼーっとしてる時間に、何かと戦っているような子どもや、１人でプチプチずっとゲームのことをやっている子ども。TikTokの踊りをやっている子どもなど、動画が頭の中にきっと染みついていて、静かになると自然に浮かんできてしまうような、ちょっと心配な子どもたちもいます。

私がとても大事な幼児期の心の栄養だと思っている、絵本の時間になった時に、動画に常に心や頭を使っている子どもたちは、静止画に興味を持てなくなっている感じがします。絵本のような静止画は、「次何が出てくるかな？」「やっぱり自分の思った通りだった！」のような、想像力を掻き立てられる良さがあり、絵本の大切さだと思います。絵本を見られない子どもたちは、この想像力が育っていないので、危険予測があまりできず、危険な遊びをしたり、友だちや他者への想像力も湧かないため、加減がいまひとつわからない。「こうしたら痛いかな？」「これしたら嫌かな？」という想像力も欠如してきており、手加減がわからないのだなと感じることがあります。

動画の影響を深刻に保護者と話をしたくても、「私もスマホが好きですから。」となかなか通じないところもあります。以前は、「共育て」のことも、「一緒に子どものことを考えていこう。」と話し合えてきたところが難しくなっていると感じます。 「保育園は保護者が利用するところ」という意識が高くなっているなと感じています。便利で預けやすいということが

支援が必要な子どもがいた時に、「自分となんか違う…。」と感じていると思うのですが、その中で自然と、その子の好きなことやできること探しを上手にしていたり、どうしたら一緒にできるかと考えたり、そこらへんの綺麗事ではなくて、子どもが心から優しくなっていて支援の必要な子どもも、まわりのみんなも育ちあうことを実感した１年でした。

○　縁キッズ　木村

一般の子どもたちはできることがたくさんあります。例えば、靴をしまったり、泡をつけて手を洗ったり、返事をするときに元気な声を出して手を挙げたり。支援が必要なこどもたちも、周りの友だちを見て、真似をする機会を得ていると思います。大人から伝えるよりも、同世代のこどもから言われた方が、自然で分かりやすく動くことができるこどもたちも、たくさんいると思います。 友だちに「 一緒にやろう！おいで、おいで！」なんて言われたら、理由がわからなくてもそばに行って、見て真似て、できることが増えるかもしれません。

何気ない日常の中に、たくさんの可能性が広がる空間があり、思い出作りができる環境が、幼稚園や保育園にはあると思います。場合によっては、「うまくできない。」「やりたくない。」「行きたくない。」そんな気持ちの時もあるかもしれませんが、少しでも同じ時間の共有、共感の場をもてるとよいと思っています。

３．今の時代の現場のお話

○松山聖ルカ幼稚園　堀江

最近のこどもたちや保護者をみていて、コロナがかなり影響していると思います。マスクをつけなければいけない状況が続いて、顔を認識することも難しく、３年間在籍していても、保護者の顔がわからないまま、卒園していくような状況もありました。親同士も時間差で登園してもらった影響で、つながりが希薄になってきているように感じます。送り迎えの時にお喋りをする機会も減り、打ち解ける機会が奪われていた時期だったと思います。なので、保護者同士が繋がらないと、子どもの様子もあまり伝わらず、喧嘩をして怪我をさせてしまった場合、昔は「おたがいさま」で済んでいたところも、今は「来年度あの子とは、一緒のクラスにしないでください。」といった要望になってしまいます。

やはり 相手と喋るということは、相手の気持ちがわかって安心ができると感じます。幼稚園では、子どもは友だちができれば楽しいところになるのですが、保護者は不安がいっぱいなのだと思います。園としては、コミュニケーションが取れる場を、意図的に作っていけたらよいと思います。

また、様々な保護者がおり、「怪我をさせないように。」「トラブルにならないように。」とピリピリしていて、先手先手をうってしまうところもあります。 子どもにとって本当にそれが良いのか…と疑問なこともありますが、やりにくいこともたくさん出てきていると思います。

○　なかよし保育園　大塚

先ほどゆうちゃんの話をしましたが、実は数年前の話です。その時と今の子どもたちとは、少し違う姿であったかなと思います。

子どもは自分自身が満たされて、初めて周りに目が向き、周りのことに気づいたり、周りの子に優しくすることができるようになると思うのですが、今の子どもたちを見ていると、なんだか満たされていないような、１人１人余裕がない印象があります。

子どもたちが大人の忙しい時間に巻き込まれているのかもしれません。また、気持ち的なものが満たされていないのかもしれませんが、そういう子どもが多いと正直感じています。

４、５歳児でグループ活動が多くなってきた時に、自分のことで精一杯で周りに目が向かない、周りの子はどうなのかというところに意識が向かないことも多くなってきているように思います。支援の必要な子どもが増えている中で、本当は先ほどの話のように、みんなの中で普通に、支援の必要な子どももー緒にいるスタートで良いと思うのですが、周りもゆっくりな育ちの子どもも多くなっているところで、大人の人手が必要になってきています。

また、動画時代になり、スマホ依存の子どもが多くなってきていて心配しています。動画依存によって、グレーゾーンのはんちゅうに入ってきているのではないかと、感じてしまう子どももいます。動画は幼児期の子どもの脳には、